

富山文学の会 十年の軌跡

——二〇〇九年から二〇一八年まで——

富山文学の会

富山文学の会が、十周年を迎えた。これを機に、この十年の活動を振り返ってみたい。

その前に、参考として、この十年を具体的にイメージできるよう「読者が選ぶ県内10大ニュース」(『北日本新聞』12月)の1位を挙げておこう。

- ① 一年目 二〇〇九年(平成21年)
「おくりびと」米アカデミー賞外国語映画賞
- ② 二年目 二〇一〇年(平成22年)
クマ出没 人身被害相次ぐ
- ③ 三年目 二〇一一年(平成23年)
「えびす」食中毒で5人死亡
- ④ 四年目 二〇一二年(平成24年)

新湊大橋が開通

⑤ 五年目 二〇一三年(平成25年)

富山一が夏の甲子園8強

⑥ 六年目 二〇一四年(平成26年)

富山第一高サッカー全国制覇

⑦ 七年目 二〇一五年(平成27年)

北陸新幹線が開業

⑧ 八年目 二〇一六年(平成28年)

田知本・登坂選手が金メダル

⑨ 九年目 二〇一七年(平成29年)

「富富富」新富山米の名称決定

⑩ 十年目 二〇一八年(平成30年)

奥田交番襲撃2人死亡

一 夜明け前

◎富山文学の会 前史

富山文学の会が発足したのは、二〇〇九年の秋である。が、もう少し遡った時点から、いわばその前史から書き留めておくことにしよう。この時期のことは会員であつ

でも知らないことが多いと思われるからである。

これまでの富山県は「文学不毛の地」と言われ、文学研究においても「後進県」と目されていた。たしかに事実として文学不毛の地であったという面も否めないだろうが、しかし、それ以上に文学研究の遅れの方がより深刻であった。富山県は他県に比べて高等教育機関が少なく、また産業県であることから実業志向が非常に強く、文学研究のプロパーが極端に少なかったことがその最大の原因であった。もちろん、一般の愛好家や読書家は少なくなく、熱心に活動していたのだけれども、そのことがかえって文学研究を必要としなかったという皮肉な結果をもたらした。富山県の多くの人々にとって、文学とは教養であり、趣味であり、それ以上のものではなかった。なるほど、富山県に文学研究者がまったくないなかったというわけでもないのだが、なかなか定着しないし、絶対数も少なかったので、大きな動きを生むには至らなかった。また、当時の人文科学には共同研究という発想がなかったことも災いした。

そのような状況にあつて、富山文学の会が誕生することになった背景には、二つの出来事があつた。一つは日

本社会文学会の富山開催、もう一つが文学館建設の運動であつた。

二〇〇七年一月一〇日から一二日の三日間にわたり、富山大学で日本社会文学会の秋季大会が「文学に見る環日本海」のテーマのもと開催された。文学の全国学会が富山県で開かれたのは非常に珍しく、日本社会文学会の大会に限って言えば、これが初の開催となつた。

幸い、この研究会は好評であつた。『社会文学』第29号（二〇〇九年二月一七日発行）の特集〈環「日本海」文学の可能性〉に結実した。成田龍一「環日本海文学の可能性——地域文学史を書き換える試み」を巻頭論文とし、金子幸代「小寺（尾島）菊子と「女子文壇」・「青鞥」、今村郁夫「小泉八雲のヘルン文庫」を含めた七本の特集論文、さらには紹介欄に逸見久美「父翁久允と移民文学」、エッセイ欄に黒崎真美「社会文学者横山源之助と富山」、丸山珪一「孫蔵の肖像と日本近代——中野重治『村の家』のひとつの問題」などが掲載された。

ここに富山文学の会の萌芽があることは、確かである。この大会を運営し、この特集号の編集委員長を務めたのが、後に富山文学の会を興した富山大学人文学部教授の

金子幸代であった。金子のリーダーシップとカリスマ性には大きなものがあり、狭義の研究教育の枠に収まらず、富山の文学研究を牽引し、多くの足跡を残した。

富山県内では『北日本新聞』の「越中文学館」という連載が好評を博してもいた。この連載は、二〇〇七年八月から〇八年九月まで四十七回にわたり、朝刊の文化欄に掲載され、最終的には、北日本新聞社編集局編著『越中文学館』(北日本新聞社、二〇〇八年一〇月一七日発行)としてまとめられた。二〇〇八年一〇月一七日には、いわばメディア・イベントとして「越中文学展」および「越中文学の魅力シンポジウム」が北日本新聞社本社で開催され、富山市出身の直木賞作家・源氏鶏太を中心とした展示などにより、文学館建設の機運が高まった。

このような流れの中、富山県も文学館建設へと積極的に動き出している。まず、生活環境文化部文化振興課が県内の有識者を集め、ふるさと文学魅力推進検討委員会を設置した。その目的は、「富山県ゆかりの文学を広く紹介し、ふるさとへの愛着心を醸成するなど、富山の文学振興を図るための方策を検討するため」である。二〇〇八年六月二日、富山大学学長(当時)の西頭徳三を座長と

し、その初会合が開かれた。この席には八木光昭、木下晶、近藤周吾も出席していた。会合後、八木と近藤は初対面にもかかわらず、今は閉店してしまった喫茶店「ロニアン」(教育文化会館の裏)にて富山文学研究の将来について熱く語り合ったという。二〇〇九年二月三日、同委員会は五回の討議を経て「ふるさと文学の振興に関する報告書」を富山県に提出、文学館建設の方向性とその具体像を明らかにした。

県外に目を向けると、神奈川近代文学館では二〇〇八年一〇月から堀田善衛展が行われていた。ここでも富山に文学館があればという話になっていた。(この堀田展は結局、二〇一〇年に高岡市美術館にて開催された。)

ともあれ、以上のような背景の中、富山文学の会もまた胎動しつつあった。

二 “創業”の第Ⅰ期——シンポジウム時代

①二〇〇九年 富山文学の会 誕生

二〇〇九年九月三〇日、富山文学の会の第一回の会合

が開かれた。場所は、西町にあるオレンジシャリマティ総曲輪店。参加者は、金子幸代・丸山桂一・萩野恭一・黒崎真美の四名。当時、金子は富山大学教授（現・名誉教授）、丸山は金沢大学名誉教授、萩野は射水市中央図書館の前館長、黒崎は富山国際高校の講師（現在は富山大学、富山高専の非常勤講師も兼務）。テーマは「ふるさと文学の発掘と普及に向けて」。金子・丸山・黒崎は日本社会文学会のメンバーであつたが、「ふるさと文学」とあるのは萩野の助言があつた。富山県は当時、「ふるさと文学」という言葉を多用していた。初期の富山文学の会がしばしば「ふるさと文学」という語を掲げるのは、文学館建設運動を意識していたからにほかならない。

これ以降は、富山大学人文学部で実施された。第二回は、同年一〇月二一日に開催。やはり「ふるさと文学について」と題して、各自がどのようなテーマを持っているかの発表が行われた。発表といつても、ブレインストーミングのようなものだったのだが。参加者は先の四名に加え、勝山敏一・高熊哲也・近藤周吾・今村郁夫が加わった。勝山は桂書房の代表。高熊は当時、富山高専の准教授で、近藤が講師だった。今村は富山大学大学院生

だった。

この回では、富山県の「ふるさと文学魅力紹介活動支援事業補助金」を申請する相談がなされた。その際、会の規約づくりの必要から、金子が代表、丸山が副代表、黒崎が事務局長ということが決定された。規約には「本規約は2009年10月15日より施行する。」とある。規約の施行日と、会の開催日の間にズレが生じているが、これは申請の兼ね合いによるものだった。

第三回は同年の一二月一七日、萩野恭一が「ふるさと文学の現在」という題で公開研究発表を行っている。ここで瀧澤弘が合流した。瀧澤は富山大学名誉教授。日本社会文学会にも参加していた。

以上を総合すると、富山文学の会の創立が二〇〇九年秋であることは確実だとしても、日付を特定するのは難しい。九月三〇日説、一〇月一五日説、一〇月二一日説の三種が立つからだ。

ちなみに、同じ二〇〇九年の一〇月には富山高専専門学校が開校した。富山文学の会の出発は、高熊の所属する富山工業高専（現・富山高専本郷キャンパス）と、近藤の所属する富山商船高専（現・富山高専射水キャンパ

ス)が折しも高度化再編し、全国で四つのスーパー高専として始動したそのタイミングとも軌を一にしていた。歴史に「もし」はないが、もし九月末日に高熊と近藤も集っていたら、彼らはまだ同僚ではなかった。

この年の特筆すべき出来事としては、金沢の徳田秋聲記念館が一〇月一日から二月一三日までの間に「生誕130年記念 小寺菊子展——秋聲と北陸の作家たちⅡ」を開催したことだろう。これも金子の尽力が大きかった。

②二〇一〇年 第一回シンポジウム(富山大学)

第四回は二〇一〇年二月一七日に、金子幸代が「小寺菊子の児童文学」という題で公開研究発表を行った。このとき、第一回シンポジウムの打ち合わせも行われた。

最初の年のメンバーは、日本社会文学会への参加者をコアとしつつ、金子の伝手と、富山在住の日本近代文学会会員に片っ端から声をかけるといふ方法により集められた。しかし、この方法では当然、限界があった。ところが、幸いなことに、申請していた「ふるさと文学魅力紹介活動支援事業補助金」を受給できることとなり、シ

ンポジウムを開催できることになったのだ。多くの方に、私たちの活動を知っていただく好機となった。

二〇一〇年三月一三日、第一回のシンポジウムが行われた。場所は、日本社会文学会が開かれたのと同じ富山大学人文学部二階の4番教室。第一部が朗読、第二部が研究発表。朗読サークル「言の葉」による三島霜川「水郷」の朗読を入れたことが奏功し、用意した資料が足らなくなるほどの盛況だった。「少年少女の眼から見たふるさと富山の文学と風景」という総題のもと行われた研究発表も、それぞれに力が入っていた。萩野恭一「瀧口修造の描くふるさと」、黒崎真美「横山源之助の描いた子供——『貧しき小学生徒』」、金子幸代「小寺菊子の児童文学」、丸山瑠一「堀田善衛と『ふるさと』問題」、近藤周吾「文学にとって『ふるさと』とは何か」の五本は、それぞれ異なる作家やテキストを取り上げながらも、少年少女という視座から富山の文学を捉えており、清新であった。

このシンポジウムで配布された全94ページの『富山文学の会ふるさと文学を語るシンポジウム報告書』は、表紙に当時のポスターを印刷した予稿集であったが、たちまちのうちに品切れとなり、現在はほとんど残されてお

らず、関係者でも入手が困難な稀少な冊子となった。なおこの冊子には、表紙や目次には名があるものの、萩野の論文が収められていない。手違いがあったとのこと。また、表紙には名前が出てこないが、公開読書会の予稿として、高熊哲也「蜃気楼の町魚津を背景とする「押し絵と旅する男」」も掲載されていた。

ある種、伝説的なシンポジウムであったと言えるかもしれない。日本社会文学会大会と違って、県外の人材に頼らず、曲がりなりにも富山在住の研究者だけでこのシンポジウムを成し遂げたからである。私たちは、これによって、自信を得た。このシンポジウムがなかったならば、富山文学の会は十年もの長きにわたって、活動を続けてくることはできなかっただろう。その意味では、このシンポジウムが富山文学の会の原点と言えるかもしれない。三島霜川、瀧口修造、横山源之助、小寺菊子、堀田善衛に加えて、角川源義、田中冬二、森山啓といった、さまざまな文学者たちが次々と紹介されていく。実際、このシンポジウムは、この会の今後の研究内容の縮図となっていた。「ふるさと文学魅力紹介活動支援事業」に改めて謝意を表するとともに、朗読サークル「言の葉」の

皆さんにも感謝したい。

この年にはほかに、四月に丸山珪一による公開読書会「堀田善衛「鶴のいた庭」」、六月に黒崎真美による研究発表「1910年の横山源之助」、八月に高熊哲也による公開読書会「江戸川乱歩「押し絵と旅する男」」、十二月に勝山敏一による研究発表『女一揆の誕生』が行われるなど、充実していた。公開読書会は、中央通りであった「和が家」で行われた。金子や高熊には、まちなかの賑わいを創造しようとする志向があった。

一〇月には、金子のはからいで、富山大学で行われた国際シンポジウム「文学における国際交流―異文化理解の検証と普及」でのデンマークコペンハーゲン大学(当時)の長島要一の講演等を聴講することもできた。

この年に刊行された会員の著作としては、金子幸代監修・解説『小寺(尾島)菊子選集』(全六巻、富山大学人文学部比較文学・比較文化研究室、二〇一〇・三)や勝山敏一『女一揆の誕生―置き米と港町』(桂書房、二〇一〇・一二)がある。

③二〇一一年 第二回シンポジウム（富山大学）

二〇一一年は、会の運営も軌道に乗り始めた。

二月一六日に萩野恭一「新発見資料瀧口修造の短歌七首」を行い、翌月のシンポジウムの打ち合わせを行う。

三月一九日には富山大学人文学部4番教室にて、第二回ふるさと文学を語るシンポジウム「現代から見た富山の作家と作品」が開催された。この年は三部制で、第一部が金子幸代の基調講演「小寺菊子の少女小説」、第二部に近藤周吾「川口清と源氏鶏太」、丸山珪一「幻想文学としての「鶴のいた庭」、高熊哲也「幸田文「木」「崩れ」をめぐって」という三本の発表が続ぎ、第三部が昨年同様、朗読サークル「言の葉」による幸田文「崩れ」の朗読であった。さらには、紙芝居「瀧口修造の少年時代」

（絵 野島一子 作 野島清治）の展示も行われた。

この年には他にも、四月に近藤周吾による公開読書会『痴人の愛』が「和が家」で行われた。六月に金子幸代による研究発表『鷗外と近代劇』があった。八月に丸山珪一による公開研究発表「人間生活と時間」がMAG.NET富山まちなか研究室で行われた。一〇月に高

熊哲也による研究発表「幸田文と国語教科書」があり、一二月に黒崎真美による読書会「室生犀星「古城下町へ」が八百松亭で行われた。（場所を特記しないものは、すべて富山大学人文学部。）

この年の特筆すべき出来事としては、歌人・作家の辺見じゅんの死去であった。高志の国文学館の館長に内定していただけにショックであった。

この年に刊行された会員の著作としては、金子幸代『鷗外と近代劇』（大東出版社、二〇一一・四）がある。

④二〇一二年 第三回シンポジウム（富山大学）

二〇一二年は、前年六月に金子に誘われ加入した新メンバー中山悦子による研究発表「富山県出身の偉人、独学の国語学・国文学者―山田孝雄について」が二月に行われ、シンポジウムの打ち合わせもこのときに行った。

第三回ふるさと文学を語るシンポジウムは、二月二六日に富山大学人文学部4番教室で開催された。前年同様の三部制で、第一部が丸山珪一による講演「堀田文学の北陸モチーフ」。第二部がシンポジウム『場』として

の富山」で、司会に近藤周吾と中山悦子を立て、金子幸代「小寺菊子と富山」、高熊哲也「幸田文と国語教科書」、黒崎真美「室生犀星「古城下町へ」の三本の発表が行われた。第三部では、朗読サークル「言の葉」による小寺菊子作品の朗読が行われた。

この年には他にも、四月に黒崎真美による公開読書会「古城下町へ」に描かれた少女」がフォルツァ総曲輪で行われた。六月に高熊哲也による研究発表「泉鏡花「蓑谷」について」があった。また、一〇月には、富山文学の会では初の文学散歩「伏木堀田文学散歩」が行われた。これは丸山珪一を中心とし、野村剛・澤田隆彰・萩野恭一が協力して成った労作であり、一同はその緻密な実証に溜飲を下げた。(ここで開拓された文学散歩は以後、日本近代文学会北陸支部や、丸山が翌二〇一三年に興すこととなる堀田善衛の会でも踏襲される名物コースとなった。)一二月には近藤周吾による読書会「太宰治「走れメロス」研究史」が漁菜亭で行われた。

この年の特筆すべき出来事としては、三月一日、金子幸代の『鷗外と近代劇』が第20回やまなし文学賞研究・評論部門を受賞したことと、七月六日に高志の国文学館

がオープンしたことである。

⑤二〇一三年 第四回シンポジウム(高志の国文学館)

二〇一三年二月、金子幸代による研究発表『鷗外と近代劇』補遺』を行い、例年のようにシンポジウムの打ち合わせを行った。

三月三日、第四回ふるさと文学を語るシンポジウム「文学の原風景」が高志の国文学館101研修室で開催された。これが富山文学の会が高志の国文学館を使用した最初のイベントとなった。会場の関係から時間を切り詰める必要があった、これまでの三部制から、研究発表のみの構成となったところが残念であったが、それでも多くの観客を集め、好評であった。黒崎真美と萩野恭一を司会に立て、高熊哲也「泉鏡花の『蓑谷』」、金子幸代「小寺菊子―徳田秋声と三島霜川―」、丸山珪一「堀田善衛の詩「故里」―「死の影」のもとで―」、近藤周吾「井上靖と源氏鶏太」という四本の研究発表が行われた。

この年にはその他にも、四月に今村郁夫による公開読書会「ヘルン文庫の書き込み調査報告―『化け物の歌』

の原典『狂歌百物語』がフォルツァ総曲輪で行われた。六月に萩野恭一による研究発表「瀧口修造の少年時代」があり、八月に黒崎真美による公開読書会「三島霜川「水郷」を読む」がフォルツァ総曲輪で行われた。一〇月には、高熊哲也による文学散歩「縄ヶ池（泉鏡花「蓑谷」と井波（池波正太郎ふれあい館）」を実施し、前年に続く文学散歩が好評を博した。一二月は丸山圭一による読書会「堀田善衛『路上の人』」が八百松亭で行われた。

この年は、水野真理子『日系アメリカ人の文学活動の歴史の変遷——1880年代から1980年代にかけて』（風間書院、二〇一三・三）、『詩が光を生むのだ 高島高詩集全集』（桂書房、二〇一三年一〇月）が刊行された。

この年から高志の国文学館が、富山県ゆかりの文学や郷土の研究を行う優れた団体や個人に奨励金を交付する「高志プロジェクト」を開始した。第一回に選ばれたのは丸山圭一「堀田善衛の北陸、北陸の堀田善衛」、萩野恭一「須山ユキエにおける〈雪〉へのあこがれ―越中万葉に惹かれた女性移住者のまなざし―」、金子幸代「富山の女性作家の調査研究とデータベースの構築」であった。

⑥二〇一四年 第五回シンポジウム（高志の国文学館）

二〇一四年は二月に金山克哉による研究発表「詩人高島高をめぐって」で幕を開けた。金山は富山商業高校教諭で、この会には前年に加わった。このときに例年どおり、シンポジウムの打ち合わせが行われた。

第五回ふるさと文学を語るシンポジウムは、三月二日に高志の国文学館で開催された。まず金子幸代「小寺菊子と泉鏡花―「屋敷田甫」と「蛇くひ」―」を発表し、次に水野真理子「翁久允の人間観―在米時代を中心に―」の発表があった。その後は「小特集 三島霜川没後80年」を掲げ、中山悦子が「水の郷」を朗読し、黒崎真美「「水の郷」考」、野村剛「三島霜川の足跡―北陸との関連を念頭に」をそれぞれ発表した。前年は行われなかった朗読が復活している。ただし、発足当初から続いていた朗読が、これ以降、なくなってしまうのは残念である。（正式なプログラムにはないが、最初のころは富山高専演劇部による朗読も行われていた。これは遠く、二〇一六年一月二三日に高志の国文学館の第2回高校生による朗読会に招待された富山第一高校放送演劇部と富山高専演劇部の合同公演『青い夜道』朗

読につながっていく。高志の国文学館年報の記録では「富山第一高等学校放送部」「富山高等専門学校放送部」となっているが、正確にはそれぞれ「富山第一高等学校放送演劇部」「富山高等専門学校演劇部」である。

この年にはその他にも、四月に野村剛による公開読書会「霜川文学の原点『ひとつ岩』を読む」がフォルツァ総曲輪で開かれた。六月に近藤周吾「新民謡の流行―『民謡詩人』を中心に」、八月に丸山珪一「名前をめぐる問題あれこれ」、一〇月に水野真理子「概説 翁久允の生涯と思想―久允文庫所蔵の書籍を視野に入れて―」という研究発表が行われた。八月と一〇月の会場には富商会館が使われた。この年の特徴としては、金山、水野、野村ら、新しい会員の活躍が挙げられよう。金山は富山商業高校教諭、水野は富山大学非常勤講師（四月から准教授）、野村は在野の研究者で、緻密な考証に基づいた年譜研究に力を発揮する。さらには、西田谷洋が、愛知教育大学から富山大学の教授へ転じてきた。この年は新しい仲間が加わり層が厚くなった、と記述できるはずだったが、この会の代表である金子幸代が病となり、秋から富山大学を去らざるを得なくなった。さらに悪いことに、富山

県の補助金が第五回シンポジウムまでで打ち切りとなった。このダブル・パンチは大きな痛手となった。これまでに金子に頼りきり、補助金に依存してきたからである。

これは富山文学の会だけのピンチではなかった。富山大学人文学部比較文化分野、日本近代文学会北陸支部、文学に親しむ会の運営など数多くの業務に連鎖した。急遽、富山高専の近藤周吾が兼務し代行することになった。富山文学の会の代表代行（後に代表）には、同じく富山高専の高熊哲也が就いた。このときに私たちは改めて金子の偉大さを思い知ることになったのである。

この年は、金子幸代編集・解説『小寺菊子作品集』（桂書房、二〇一四・二）が刊行された。

高志の国文学館の高志プロジェクトには、優秀として金子幸代「富山の女性文学の基礎的研究」が認定された。

三 “守成”の第Ⅱ期——『群峰』時代

⑦二〇一五年 『群峰』の創刊

二〇一五年は、まさに“守成”の年であった。県から

の補助金のみならず、金子の想定外の退場により富山大学の施設を使用することすらできなくなった私たちは、墜落する飛行機を操縦するような不安を抱いた。

まず経済的に切り詰めるため、宿願であったはずの高志の国文学館の使用を泣く泣く断念、富山大学に会場を戻した。まだ金子の名前が辛うじて富山大学に残っていたことと、西田谷、水野が加わったこと、近藤が臨時で雇われていたことを利用した。

シンポジウムの報告書は、補助金打ち切りに伴い、発行義務がなくなったため、新たに機関誌『群峰』を発行することにした。これまでのように業者に全面委託というわけにはいかなくなり、簡素化せざるをえなくなり、創刊号は高熊の手作業によって編まれた。

二月、高熊哲也による研究発表「『蛇くひ』をめぐる」が富山大学で行われた。ここで今後についての種々の相談も行われた。

三月七日、第6回研究大会が富山大学人文学部四番教室行われた。これまでの名前を研究大会と改めたが、通し番号は継続した。黒崎真美「横山源之助と富山」、野村剛「歌人・藻谷銀河——戦後70年に想う」、近藤周吾「文

学者は県境を越える——井上靖記念館所蔵の富山文学関係資料について」の三本が発表された。金子のいない寂しさは埋めようがなかったが、これまで六年の蓄積で何とか乗り切った。

この年はほかには、四月に野村剛による公開読書会「横山源之助『日本の下層社会』を読む」がフォルツァ総曲輪で行われた。六月には中山悦子による研究会「馬場はるとラフカディオ・ハーン ハーン作「ハル」とともに」が高志の国文学館で行われた。大会で高志の国文学館を使えなかったため、小さな部屋ではあったが、ここで高志の国文学館を利用した。中山はこのとき、高志の国文学館長秘書であった。八月には高熊哲也による「泉鏡花「蛇くひ」をめぐる(再)」が藤本研究室で行われた。澤田の配慮により、藤本研究室をお借りした。一〇月には、近藤周吾が文学散歩「源氏鶏太の散歩道」を担当した。金山の助力も得て、富山商業高校から出発し、中山輝旧邸を経て、高志の国文学館に寄り、新発見の写真を初公開した後に、城址公園、源氏鶏太生家跡を巡った。

この年の特筆すべき発見としては、源氏鶏太の写真数百点がある。幼いころの源氏鶏太の家族写真や軍隊時代

の写真など貴重な写真群を近藤が発掘した。

また、この年に特筆すべき出来事としては、富山大学の人事である。前年の水野、西田谷に続いて、小谷瑛輔が四月に富山大学准教授に着任した。それぞれに多忙な三氏に金子の役割のすべてを期待するわけにはいかないもの、それぞれの立場ややり方によって、富山の文学研究や富山文学の会に助力いただいた。また、富山大学ヘルン研究会などの新機軸を次々と打ち出し、新しい動きを起こしていったことは好ましいことであった。皮肉なことではあるが、金子がいなくなつた後、金子が願っていた文学研究の最盛期が富山にも訪れることになる。

高志の国文学館の高志プロジェクトには、優秀として近藤周吾「環日本海地域におけるメディアミックス—文学と隣接ジャンルとの交渉、特に前史としての詩と新民謡の交渉史を中心に—」が認定された。

⑧二〇一六年 八木光昭の登場

二〇一六年は、二月に野村剛による研究発表「啄木『一握の砂』の成立と橘智恵子 附…札幌の橘家と越の橘家

のことなど」が藤本研究室で行われた。

三月五日、富山大学人間発達科学部において第七回研究大会が開催された。懸案の会場は、西田谷の尽力があった。第一部に八木光昭を招き、講演「富山の近代文学」が行われた。八木は、富山文学研究の第一人者であったが、聖徳大学教授として東京にいた。ところが、定年されて富山に戻ってきたため、八年目にしてこの講演がようやく実現した。八木は後に会員となり、金子のいなくなつた今、心強い後ろ盾となつてくれている。第二部では、金山克哉「詩人高島高の活動くいくつかの雑誌を中心に」と、近藤周吾「源氏鶏太の伝記的研究」の二本の研究発表が行われた。

この年は他にも、四月に今村郁夫による研究発表「小泉八雲『常識』研究—ヘルン文庫書き込み調査から—」を藤本研究室にて、六月に高熊哲也による公開読書会「泉鏡花『黒百合』を読む」を文苑堂書店豊田店にて、八月に金山克哉による研究発表「詩人高島高の〈冬〉く『北方の詩』から『山脈地帯』へ」が行われた。文学散歩は十月、澤田隆彰による「高志の国文学館」周辺の文学散歩」が県民カレッジと合同で開催された。鱒寿司の食

べ比べが行われるなど、楽しいイベントとなった。

この年の著作としては、近藤周吾「富山の文学——文学とサブカルチャーの『両輪駆動』」（二〇一六・一一）がある。日本近代文学会の『日本近代文学』に、富山の文学の論考が載るのは初のことであった。ちなみに、この研究ノートの英題は“On the Koshinokuni Museum of Literature”である。

高志の国文学館の高志プロジェクトには、優秀として黒崎真美「横山源之助の人物像に迫る」、小谷瑛輔「若者・若手作家の感性からの見る富山文学」が認定された。

⑨二〇一七年 上田正行の登場

二〇一七年は、二月に近藤周吾による研究発表「富山の文学」が行われ、研究大会の打ち合わせが行われた。

三月四日、第八回研究大会が富山大学人文学部4番教室で開催された。会場は小谷の尽力による。第一部に上田正行を招いての講演「日本海詩人」のこと、千石喜久のこと」が行われ、第二部では黒崎真美「横山源之助と郷土の人々」と、小谷瑛輔「山内マリコ作品における〈地

方〉と〈階層〉」の二本の研究発表が行われた。上田は金沢大学名誉教授で、室生犀星記念館と徳田秋聲記念館の両方の館長を務める石川県の文学研究の第一人者である。また、満を持して登場した小谷の発表は、これまでの会が取り上げてこなかった現存する作家である山内マリコを取り上げ、その内容も新鮮であった。

この年はその他にも、四月に木下晶による研究発表「愛玩から鑑賞へ 林忠正の提言」が富商会館で、六月には近藤周吾による公開読書会「源氏鶏太『青空娘』を読む」が富山大学で、八月には萩野恭一と近藤周吾による読書会「須山ユキエ『延段』」が富山高専射水キャンパスでそれぞれ行われた。文学散歩は一〇月、黒崎真美による魚津文学散歩が行われた。

木下は県立高校校長協会会長を務めるなど、富山県の国語教育の分野で大きな功績を残した後、現在は富山県立大学参与で、『とやま文学』の編集長。

この年の特筆すべき出来事としては、全国国語国文学会が富山大学で開催されたことである。高志の国文学館館長の中西進が会長である縁もあり実現した。上田正行による講演「千石喜久という詩人——『日本海詩人』を

視野に入れつつ」などが行われた。

この年は、西田谷洋『村上春樹のフィクション』(二〇一七・一二)、小谷瑛輔『小説とは何か?——芥川龍之介を読む——』(ひつじ書房、二〇一七・一二)が刊行された。また、西田谷洋の編んだ『文学研究から現代日本の批評を考える——批評・小説・ポップカルチャーをめぐる』(ひつじ書房、二〇一七・六)に西田谷洋『機動戦士ガンダムUC』における主体性」、近藤周吾『『おおかみこどもの雨と雪』論——『二十四の瞳』『八日目の蟬』とのテキスト連関』、小谷瑛輔『亀井秀雄『感性の変革』と柄谷行人『日本近代文学の起源』』が載り、萩野恭一ら富山県郷土史会の編んだ『郷土研究を志す人へ』(桂書房、二〇一七・一一)には近藤周吾が「富山の文学に興味を持つ若い友人へ」を寄稿した。

⑩二〇一八年 新しい世代の台頭

二〇一八年は、二月に孫媛媛による研究発表「芥川龍之介の金沢訪問と室生犀星」が行われた。孫は当時、富山大学の大学院生で、現在は金沢大学大学院博士後期課

程に在籍する留学生。近藤周吾の説を批正し、新しい世代の台頭が印象づけられた。

三月には、第九回研究大会が富山大学人文学部4番教室で開催された。会場は昨年度に引き続き、小谷の尽力による。第一部では、高熊哲也「高熱隧道」と「黒部の太陽」と野村剛「音楽少年」から「詩人・堀田善衛」への二本が発表された。第二部では、丸山珪一による講演「『曇りの日』のことなど——堀田善衛生誕百年を迎えて」が行われた。副題にもあるとおり、堀田善衛生誕百年を記念して、この回は堀田善衛小特集となった。

この年はその他にも、四月に中山悦子による研究発表「はじめに——文学と観光の相互関連」没後20年 佐多稲子「水」を読む」が高志の国文学館で行われた。六月には富山大学日本文学分野近代ゼミと共催で「山内マリコ『メガネと放蕩娘』を読む」が行われた。小谷瑛輔の指導により、若い大学生二名が発表した。八月には金山克哉「高島高の戦争詩」と、谷川拓矢「山川健一『人生の約束』の二本の研究発表が行われた。この時期に二本の研究発表が行われることは例がないが、谷川が福島県からわざわざ来ることから、このような形になった。谷

川は福島県の私立高校の教員。文学散歩は一〇月、村上瑞季による「中央通り・いたち川 山内マリコ」『メガネと放蕩娘』ツアー」が行われた。村上は六月にも発表した富山大学の学部生である。

この年には、黒崎真美『童子と笛の音と富山と——室生犀星論——』（龍書房、二〇一八・八）、竹内栄美子・丸山珪一編『中野重治・堀田善衛 復書簡 1953-1979』（影書房、二〇一八・一一）が刊行された。また、木下晶が編集長を務める芸術文化協会の『とやま文学』第三十六号（二〇一八・三）が「特集 女性作家として生きた二人——小寺菊子・尾竹紅吉——」を組み、西田谷洋「富山への相反する思い——小寺菊子「念仏の家」、水野真理子「小寺菊子と翁久允——文学を通じた交流」、小谷瑛輔「レズビアニズムと尾竹紅吉」を掲載した。

四 今後の展望

金子幸代が去った後しばらくは、富山高専勢——高熊・近藤・黒崎——が急場を凌いできた感もあったが、小谷瑛輔の活躍などにより、富山大学のプレゼンスが再び高

まってきたと言えよう。若手の台頭が目立ち、新しい時代の到来を予感させる。その一方で、その小谷が富山を去ることになり、富山文学の会は再び試練に立たされることになりそうだ。富山の高等教育機関で富山の文学を専門的に探究する場がなくなってしまうことは、（若い世代を育てるといふ観点からして由々しき事態であると言えらる。）

二〇一九年の第一〇回記念大会がさしあたり、この会の、そして富山の今後の文学シーン、研究シーンを占う一つの試金石となるだろう。

付記 この十周年記念号を刊行するに際しては、創業者である金子幸代氏より過分なる御寄付を頂戴している。これまでの幾多の御高恩とともに、心よりの謝意を表するとともに、氏の回復を一同、祈念してやまない。